

道祖神 しんぶん 第二号

2021年12月1日
発行：道祖神芸術調査グループ

山梨アートプロジェクト 2021
深澤孝史
「道祖神リプレゼンテーション」

ご意見・ご感想は
dousojin2021@gmail.com
までお送りください。

どんどん焼き

芹沢昇

普通、地面に穴を掘るのは、ゴミを捨てるためだとか、人を落とすためだとか基本的には手段であるはずであるが、子供の頃、夢中になって地面に穴を掘ってそれで満足してしまったことはないだろうか？手段を目的と化してしまえるほど「穴」を掘ることには、魅力があるのである。

今回の「いしのまつりば」(※)でも子どもが一心不乱に石を叩いて穴をあけている姿を見る限り、あながち間違っていないかなと思ってしまう。

ここで、「盃状穴」である。盃状穴は、道祖神をはじめとする石造物や磐座などに穿たれた、すり鉢状の穴のことで、なぜ穿たれたのかは判然としていない。しかも、普通見過ごされてしまう。

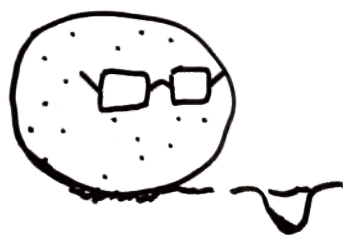
例えば、お参りの風習として台座を叩くだけなら、きれいな穴にする必要はないが、多くの盃状穴は、叩いて穴を穿った後にゴリゴリと擦ってキレイに調整した痕がみられる。

なんか、お参りすることが目的じゃなく、穴をキレイに穿つことが目的になってませんか？と盃状穴を穿った人に一時間くらい問い詰めたが、すでに廃れてしまった風習である。残念。

そんな穿つ人も夢中になっていたであろう？盃状穴。一度気がついてしまうと、石造物を見るたびに穴の有無をチェックせずにはいられなくなってしまうという呪いがかかったやうんです。ほら、道祖神の前に立ったあなた、気をつけないと無意識に「穴」を探してまよ。

(※)本プロジェクト《道祖神リプレゼンテーション》で山梨県立美術館の北池を「いしのまつりば」という石と戯れる公園として再生させた。

「『穴』の魅力」 小池準一



「どんどん焼き」これほどの射たネーミングはほかにないであろう。炎が冬の夜空を焦がし、勇壮に燃え上がるその光景が目につくようである。しかしこれは全国的な名称ではなく、各地にそれぞれの呼び名がある。それは後述する。道祖神の祭礼は一月一四日の夕刻に行われるところが多い。旧暦一月一四日は一年最初の満月の夜であり、この日に小正月の行事が行われる。最近では一月第二土曜日から日曜日に変わる場合もあるようだ。

道祖神とは村境や峠などの路傍にあって外来の疫病や悪霊を防ぐ神で、のちに縁結びの神、旅行安全の神、子どもと親しい神とされている。その起源は古く古代にまでさかのぼる。古代より石には特別の力が宿るとされていて、特に丸い石を神に見立てたり、時には石仏を造ったり、常に庶民の傍らに置かれてきた石。これが道祖神の起源とされている。厄災の侵入防止や子孫繁栄等を祈願するために村の守り神として主に道の辻に祀られている民間信仰の石造物が道祖神である。

道祖神の石碑がみられるようになるのは江戸時代寛文期(一六六一〜一六七三)以降といわれ、それ以前は自然石をご神体としていた。もともと定まったご神体はなく石、特に丸い石に神が宿るとされていた。祭礼としては平安時代、一月一五日の小正月に左義長という陰陽道による宮中行事が行われていた。これが各地に広まり道祖神祭りになったと言われている。左義長が各地に伝わったとされる祭りの主なものを以下に上げておく。

神奈川県大磯町 セエノカミサンの火祭り
富山県下新川郡入善町上野邑町地区 塞の神まつり
島根県大田市五十猛町大浦地区 五十猛のグロ
滋賀県近江八幡市 左義長まつり
岐阜県海津市 今尾の左義長祭
東京都台東区鳥越 鳥越神社の「とんど焼」

次に具体的な「どんどん焼き」についてみてみよう。地域の各戸から門松、ササ竹、しめ飾りなどを集め

一四日夜、道祖神場で燃し、その燃える火を形容してどんどん焼き、どんどん焼きなどと呼ぶ。祭礼の日通常正月一五日であるが一四日から一六日までの三日間、一四日の日没から一五日の日没までの望(満月)の日、さらには元日から一五日までの一五日間と様々ある。つまり道祖神は全国的に小正月に祭られ「どんどん焼き」が行われるのである。どんどん焼きの火であぶった焼きだんごを食べれば風邪や歯痛を病まぬとされ、焼いた灰を用いれば農作物の悪虫害を防ぐ。また、書きぞめの紙を燃やし、高く上げれば書道の手が上がるなど多様な信仰に発展している。そして、その火で焼いた餅や団子を食べるが団子は養蚕の繭玉を具象化したものと考えられている。

どんどん焼きの呼び方は各地で様々あり以下に主なものをあげてみる。

どんと祭 宮城県大崎八幡宮松焚祭
さいの神・才の神焼き 新潟県新潟市、東京都摩地域、神奈川県川崎市
三島のサイノカミ 福島県大沼郡三島町
墨塗り 新潟県十日町市松之山
おんづるこんづる 富山県黒部市宇奈月町 下立神社
三九郎 長野県松本地方
かんがり、かんがりや 長野県南佐久郡川上村、南牧村
墨付けとんど(墨付け神事) 島根県松江市美保関町
片江地区

次に筆者の生まれ育った勝沼町上岩崎のどんどん焼きを具体的に紹介しよう。

旧勝沼町は四つの町村が合併してできた町であり、そのうちの一つの村は祝村と呼ばれていた。現在では祝地区といわれ、一区から九区まである。そのうちの五区と六区で一つの自治公民館が形成されている。その自治公民館の子どもクラブが中心になり「どんどん焼き」を盛り上げている。筆者が小学生の当時は曜日に関係なく一月一四日が祭りの日であり平

日は学校から帰ってくるとすぐに当番の家に行き祭りの準備を行う。そして小学生が神輿をかついで六年生のリーダーを先頭にめぐり歩き一軒一軒の玄関を「道祖神が舞い込んだ」といいながら開ける。それを合図に全員で「どんどやどんどんお祝い申せブドウが繁盛大儲け」と二回神輿をおりながら囃す。個人商店では「ブドウ」を「商売」と歌詞を変えるという芸当まで行う。これを五区六区の全戸で行い当番の家に帰り、そこで料理が振舞われる。小学生が家々を巡っているときに中学生以上は道祖神場で火を燃やすのである。その振舞われる料理はとても美味だったと今でも記憶していて、さらにその日だけは夜更かしができ(せいぜい午後八時くらいまでである)楽しい思い出である。

筆者の妻は甲府で育ち「どんどん焼き」を知らずに育った。そこで実家のどんどん焼きに連れっていったことがある。しかし「長男の嫁」として近所の人への挨拶などに追われ楽しむ暇はなかったという。

「どんどん焼き」の日は近所の住民がこぞって道祖神場に集まっているのだ。今思い出したが、数年前に一宮町に住む実弟の家を所用で尋ねたことがあった。その日はたまたま道祖神の日であり、弟家族と「どんどん焼き」に行くことになった。歩いて五分ほどの道祖神場では、丸石は杉とササタケで飾られており、その隣で火が燃やされていた。その日を囲んで近所の人たちが雑談をしていて日本酒や茶菓子が振舞われていた。子供たちは団子を焼いていた。(筆者は下戸であり姪と団子を焼いて食べていた)それは妻にとって、非常に楽しい思い出になったと今でも話している。

村境にあって外来の疫病や悪霊を防ぐ神、縁結びの神、旅行安全の神、子どもと親しい神とされ庶民に親しまれてきた道祖神。様々な役割を持った神であり決まった形はない。それだけに時代の変遷とともに忘れられそうになっている。我々の近くに存在し庶民の様々な願いを叶える神としてあり続けてきた道祖神。これからも一番近くにいた神であり続け人々の様々な願いを叶え続けてほしいものである。

人はなぜ踊るのだ

鈴木つな

私は人生のほとんどを踊りと共に過ごしてきました。最近では諦められています、若い頃はもっと落ち着いて暮らさない、と口々に諭されてきました。しかし、人間たちは古代より、踊りというものを脈々と受け継いできているではありませんか。なぜ踊るのだ？何のために踊るのだ？どうやって踊るのだ？これは私が古の民に尋ねてみたい三大質問であります。

今回のミーティング中に思い出した学生時代の作品に、三保の松原に作られた能舞台で小石を持ちながら石の時間を踊る「礫」というものがありました。生まれて初めて野外で踊ったその経験は、現在の私の踊りのスタイルの原石となっているかもしれません。

石の時間と人の時間は大きく異なります。丸石は私たちにとっては悠久の時を生きています。かつて、道祖神祭りを賑やかにしめやかに行ってきた様子も、丸石たちは記憶しているでしょう。金生遺跡の配石遺構も、人々が何かを祀ってきた様子がありありと伺えました。かの地に立つと、人々が太陽を神と崇める気持ちがわかる気がします。

踊りは祀りと共に発展し、祭りとなって広まってきた歴史があります。その根源に近づけるチャンスが今回の道祖神の調査です。

道祖神祭りの多くは、小正月に行われるために今回は間に合いませんが、先行インタビューとして、縄文大工の雨宮国広さんにお話を聞くことができました。なんと、「春駒」の担い手の一人だったのです。博物館でのレクチャーでは、我々の道祖神祭りは衰退の一途をたどっており、復活を遂げることができた祭りのひとつが「春駒」だったことがわかりました。

祭りに行われる芸能は、生きた人間がするものであります。ゆえに人がいなくなれば祭りも踊りもなくなります。そしてこのコロナの影響やいかに！私のこれからの調査は、コロナとも戦うのかもしれませんが。



道祖神小説 石の満月（前）

黒田康之



「何年ぶりだったけ」

盃を手にしたまま昌彦が尋ねた。直文はお通しの里芋煮を口に運んだ。

「三十七年ぶりだよ」

盃をあおってそう答えた。

「やっぱり、餓喰うか」

「ぶつは好きだよ」

「ああ」

昌彦は生返事をしながら、餓のぶつと山芋の千切りとお新香を注文した。昌彦は直文の定年近くなつてからの帰郷を気にしているのだろう、誘っておいても目を見ることはなかった。

「居酒屋はどこに行っても居酒屋だな」

直文はお銚子のおかわりを店主に頼んだ。「二合を二本ね」と愛想を含んだ返事が返ってきた。

「けっこう飲むんだな」

昌彦は手酌で酒を注ぎながら言った。

「こっちにいる時、居酒屋なんか行ったことないんだけどね」

そう言うと、直文は食べかけの里芋を口に放り込んだ。しばらくして、餓とお新香が出てきた。お新香にはすでにたつぶりの鯉節と醤油がかけてあった

「急な田舎暮らしで、奥さんとか大丈夫なのか」

昌彦は白菜漬けをつまみに、さらに手酌で酒を飲んだ。

直文が昌彦と再会したのは、父の名代で行った地域の老人の葬儀だった。なぜか父はその葬儀に行きたがらず、「義理だから」と直文を行かせたのだ。老人は当時まだ町役場だった役所の役人だった。昌彦は高卒で役場に就職していたので、最初の数年は何かと世話になったらしい。

その時、直文に気がついたのは昌彦の方だった。幼馴染に四十年になろうという間を開けて、君付けで呼ばれたのは、新鮮だった。

後にも先にも昌彦に「直文くん」と呼ばれたことはなく、それはそれで衝撃だったのだ。

「もう嫁さんと二人だから。長男だし」

「そうか」と昌彦は言った。

あらかたのつまみを肴に、二人はかなりのお銚子を空にした。しとどに酔って、昌彦は店主に代行車を頼んだ。

カウンターに両肘をついて、うつむいたまま昌彦は、「そういえば、学祭の打ち上げにもお前来なかったもんな」と言った。

「ああ、あの頃は酒飲みが嫌いだったんだ」

直文はもつれるように言った。

代行車が来て、二人は昌彦の車に乗り込んだ。乗り込む時に、昔まだ明滅していた街灯が、全部LEDになっていることに直文は気がついて嘆息した。

大通りから二回ほど路地に入って、車は昌彦の家の車庫に滑り込んだ。車庫には昌彦の奥さんが出迎えてくれた。どっちが代行車の料金を払うかを数回言い合って、直文は千円を昌彦に渡した。初めて見る昌彦の奥さんは、ふくよかでよく笑い、自分の妻よりもいくぶん若いのだろうと直文は思った。

「どうするんだ」

昌彦は奥さんと何か少し話してからそう言った。直文の家は同じ町内だが、数件の住宅と桃の畑を一枚はさむところにある。

「畑を突っ切れば早いんだけどな。酔ってるし、いい大人が畑の中を歩くのよな」

現に直文の足もあまり定まっていはいない。

「道で帰るか。十分はかかるぞ」

「ああ、そうするわ」

また昌彦は奥さんと何か話した。

「送ってくわ」

昌彦は奥さんに手をあげて「送ってくから」と声を張った。奥さんは終始にこやかなままだった。

（続く）